Title: 新報4641号.ec7 Page: 1 Date: 2013/08/15 Thu 13:44:09

教団新報

定価 1部140円(本体133円〒共200円)
予約購読料 1年分 〒共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140—9—145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話 03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志

クリスマスメッセージ

ヨハネによる福音書3章16〜21節

愛の派遣

小林克哉

独り子をお与えになられる犠牲こそが

今からおよそ二千年前、ユダヤのベツレヘムの家畜小屋でイエス・キリストはお生まれになられました。御言葉は、クリスマスとは「神が御子を世に遣わされた」ことだと告げています。滅びに向かう世を救うため、神が御子を世に派遣されたことこそ、クリスマスという出来事の真相なのです。

ある時、お子さんが病気になっている方が私に言われました。「代われるものなら、代わってやりたい」。それが親の心でしょう。もしわが子を犠牲にしなければならないとしたなら、それはわが身を犠牲にすることと以上に辛く厳しいことです。親と子を結ぶ愛の絆が深ければ深いほど、強ければ強いほど、そうなのではないでしょうか。

神は永遠において父であり、子であり、聖霊であられるお方です。ご自身において完全な交わりをお持ちになっておられます。御父と御子との愛の絆は深く強く完全なもの。御子が、「渇くの御父の心を想像します。「代われるものなら、代わってやりたい」と思わないでしょうか。完璧な愛を持つことのできない人間の親がわが子のことで苦しむなら、御父の苦しみは私たちの想像の及ばぬものです。私たちの罪を赦し、永遠の命を与えるため、御父は御子を世の罪を取り除く神の小羊として十字架の死に渡さなければならなかった。

ある人が愛を測る方法について語っていました。「愛はその払った犠牲の大きさで分かる」というのです。十字架に示された神の愛の大きさは、すでにあの日に示されていたものです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。

御言葉は、クリスマスという出来事が起こった理由をはっきりと語っています。神は「独り子を信じる者が一人も滅びない」ことを望まれたのです。神が世を愛されたから、二千年前にあの出来事が起こった。

「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるため」。神の目的はこの一点です。クリスマスは世が救われるためのもの。

「独り子を信じる者が一人も滅びない」ことを望まれる神は、世が救われるため、御子をご自身から引き裂き世に遣わされたのです。クリスマスにおいて神は天でご自身を引き裂かれる経験をなさったのです。そのことは、すでに十字架の始まりであったと言ってよいのではないでしょうか。

独り子をお与えになられるという犠牲こそ、御子の派遣というクリスマスの出来事なのです。そこに神の愛が示されています。

呉平安教会（西中国教区、広島県呉市）

何もないところから神の偉大な御業が

数年前、呉平安教会は伝道開始・教会創立百周年を迎えました。よくぞ何もないところに来て伝道し、教会を建てようと思ったものだと、宣教師が遣わされて来た出来事を感嘆の思いで振り返りました。

私たちは、二〇〇九年にプロテスタント伝道一五〇年を記念する時を迎えようとしています。改めてこの地に福音を伝えてくださった宣教師たちの働き、その背後にある諸外国の教会の祈りを思い起こし感謝したいと思います。愛する故郷や慣れ親しんだ教会に別れを告げ、心通い合う交わりから引き裂かれるようにして、宣教師たちは多大な犠牲を払ってこの地に遣わされて来たのです。そこには、この地に住む者たちが救われることを祈り求める愛がありました。

昨今、日本の教会の将来について危惧する言葉が聞かれます。しかし考えてみると、一五〇年前、この地には福音の伝道者もいなければ、生ける真の神を信じる信仰者もいませんでした。日本語の聖書も、勿論教会堂やオルガンもありませんでした。

しかしその何もないところから神の偉大な御業が始まりました。「独り子を信じる者が一人も滅びない」ことを望まれる神は、ミッションボードや教会によって宣教師たちを派遣し、この地に住む人々に福音を伝え、教会を建てられたのです。

数年前、分区のご用をさせていただいていた時です。実質四名の信徒が力を合わせ教会の維持に尽くしておられる教会がありました。その教会員、しかも健康を害していたご高齢の教会員が「この町から福音の灯火を消してはならない」と言われ、必死に頑張っている姿に触れました。心動かさずにいられませんでした。

これからいろいろな所で伝道所の閉鎖、教会の解散や合併が進んでいくかもしれません。私たちは伝道の困難をも知っています。しかし私たちには信仰が与えられています。私たちは、何もないところから神の偉大な御業が始まることを知らされているのです。

クリスマスの出来事がまさにそうです。イスラエルの歴史は、人間がどんなに努力しても自分では救いを勝ち取ることができないことを証明していました。地上には人間が救われる可能性は何もありませんでした。しかし何もないところから神の偉大な御業が始まりました。私たちには何もないかもしれません。しかし神にはそんなことは関係ないのです。神は「独り子を信じる者が一人も滅びない」ことを望まれたのです。滅びに向かう世を救うため、神は御子イエス・キリストを世に派遣されたのです。そこからすべてが始まったのです。私たちにはクリスマスを信じる信仰が与えられています。

神がなぜ私をこの地に遣わされたのかを

今年もクリスマスを迎えました。きらびやかな飾り、楽しげな歌、教会が一年で最も慌ただしくなる季節。神学校卒業と同時にこの地に遣わされて来て十一年目、慌ただしい毎日の中で、神様がなぜ自分をこの地に遣わされたのかを忘れていないか、自分は大切な何かを失っていないだろうかと自問します。私もまた、この地に住む人たちが救われることを祈り求める愛をもって仕えて行きたい。

クリスマス、神がなぜ私をこの地に遣わされたのかを思い起こさせてくれる時です。

私には何もありません。十一年間で知ったのは自分の無力だけです。しかし、神にそんなことは関係ありません。いつでも何もないところから神の御業は始まるからです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」「独り子を信じる者が一人も滅びない」ことを望まれる神が私たちを遣わされるのです。

（呉平安教会牧師）

荒野の声

▼祈祷会の最中、異臭を感じた。教会のあちこちで、微妙に臭う。発生源が分からない。翌日になって、犬の糞を踏んづけた痕跡と思われるものを階段と床に見つけた。誰かの靴底に付着して持ち込まれたのだろう。▼犯人は誰だ。教会学校の子どもかも知れない。推理しているうちに、はたと思い当たる。調べると果たして、祈祷会時に履いていた自分の靴にべっとりと。▼前任地で会堂建築した時、床を土足にするか否かで議論になった。靴で礼拝堂に入るのに抵抗を覚えるという人もある。せっかくのバリアフリーだし、年配者や車椅子の人は土足の方が楽だということで、土足派が勝った。▼バリアフリーで土足、開かれた教会が多くなった。結果、開かれた玄関から、いろんなものが吹き込み、持ち込まれる。靴底に付いた犬の糞までも。仕方がない。▼神聖な会堂が汚れたと躓く人が出ないように夜の間に数時間かけ、床掃除をした。掃除しか他に打つ手はない。

お知らせ

「教団新報」次号四六四二・四三号を合併号とし、一月二六日に発行致します。

なお教団事務局、出版局、年金局は二九日〜一月六日は休業致します。

総幹事 内藤留幸

Title: 新報4641号.ec7 Page: 2 Date: 2013/08/15 Thu 13:44:12

台湾の歴史と教会と人に学ぶ

ユースミッション2007 7.28 ～

恵みに満ちた台湾交流

今回、台湾最大のプロテスタント教団、台湾基督長老教会との青年交流プログラムに、教団の青年代表として参加しました。台湾から青年が参加し、共に台湾各地を訪問しつつ、台湾や福音について学ぶことができました。

台湾では、十三のユエンツーミンと言われる先住民族を含め、多数の民族が異なる言語・文化を持っています。その歴史の殆どが日本を含む外国統治の結果、複雑な歴史背景を負うに至ったことを知りました。

民族間だけではなく、世代間でも話す言語や歴史認識が異なることを知り、大変驚きました。その結果、家庭や教会内ですら言葉の「断絶」、歴史認識の「断絶」があります。さらに、弾圧の歴史から一気に民主化が進んだというコインの裏側には、氾濫する外国文化の中で誰もが自分が何者であるのか、常にアイデンティティーを探しているという台湾の姿がありました。

アイデンティティーの問題だけではありません。クリスチャンが八割以上を占める先住民族の方たちは、平地に住む漢民族系の台湾人と比べ、社会的・経済的・政治的に弱い立場に立たされていることを初めて知ることができました。

このような内部での断絶一方で、国際社会からも孤立の岐路にある台湾。中国の外圧によって、政治が紛糾しています。国として国連の援助が得られず、SARSでは多くの被害者を出しました。最近では、中米の貿易国からは国交を断絶され、国際的に孤立の様相を強めています。

中国のミサイル威嚇に脅えつつ、来春の総統選挙を控えています。同じ教会といっても、内部で色々な意見があり、特に北と南ではかなりスタンスが違います。歴史認識にも南北で、世代間で大きな乖離があるので、これは当然の結果かもしれません。政治問題は殆ど教会ではタブー視されているということでした。

このように台湾は今、内外からの問題を抱えています。同じ神に連なる隣人として、そして台湾の歴史に関わってしまった国に住む者として、私たちも台湾の人々や教会のために心を尽くして祈り、できることで支援していかなければという思いを強くしました。

一〇日間三食を共にするというのは、家族でもなかなかないことです。プログラムでは、このように食事を分かち合い、祈りと生活を共にすることで、最終日には全員が参加者全員の物マネができるほど仲良くなりました。台湾・日本の青年で互いに信仰を深め合い、神の家族として強い絆で結ばれていると実感できました。

また、今回日本から高校生が三名与えられたことも大きな恵みです。求道中の一名は、主の交わりが常に外に向かって開いていなければならないということをわたしたちに思い出させてくれました。プログラム中、彼女の存在によって、『分かり合える人のためだけの福音』ではなく、『すべての人に開かれた福音』を意識することができたことは、参加者全員にとって大きな収穫でした。

またすでに教会に通っている二名は、現在の高校生クリスチャンが抱える問題を教えてくれました。彼女たちがその純真さのゆえに、心無い言葉の飛び交う学校生活と教会との乖離に悩み、キリスト者として日々重圧の中を戦っていることを今回初めて知ることができました。

そんな彼女たちが主にある交わりの中で、日々信仰を深め、輝きを増していく様子を見て、中高生伝道の大切さを改めて確認しました。

台湾のキリスト教人口は4％です。決して多くはありませんが、様々な活動を通じて創造的な青年伝道を行なっていることを学びました。日本の私たちも地の塩として創造的に大胆に、神の愛を伝えていきたいと大いに励まされました。

貴重な機会を与えてくださった神様、またプログラムの準備に携わってくださった皆様に、心から感謝します！

（秋田公子報）

中央のTシャツを持った青年の右が秋田公子さん、同じく左が長尾有起さん

青年交流プログラムに参加し

台湾で行われた一〇日間の青年交流プログラムは、私にとって「教会」について今一度考えるきっかけとなった、とても有意義な機会であった。中でも、台湾原住民（ユエンツーミンの一つである布農（ブヌン）族の人々を訪ねることは、他のプログラムや個人の旅行ではなかなか成し得ないことであろう。台湾のクリスチャン人口は全体の4％だが、原住民の8割はクリスチャンだという。布農の人々も熱心なクリスチャンだった。我々は家庭礼拝と青年の集会、そして日曜礼拝を一緒に守らせていただいた。北京語が広く使われる現在の台湾の状況の中で、布農の人々は確固たる意思を持って布農語を使い続けており、礼拝も布農語を用いて守られていた。その中で驚いたのは、「神様」は布農語でもKAMISAMAなのである（布農語は本来文字を持たないため、アルファベットを当てている）。台湾で日常使われている北京語でも台湾語でもなく、「カミサマ」、他にも「イエスサマ」や「レイハイ」「メグミ」などは日本語と同じように発音される。なぜかと尋ねると、布農の人々にとって北京語や台湾語は「借り物」の言葉であり、自分たちの言葉ではないという意識が強い。それよりは日本語を用いたほうがしっくりくる、というのだ。

しかしその日本語も敗戦まで日本が台湾を統治していたからこそ伝わったのだ。台湾の一定の年齢層には日本語を使える人が多い。布農族にも流暢な日本語をお話しになる方がいた。非常に衝撃的だったのは、日本には感謝している、というのだ。日本はインフラを整備し、教育を施してくれた、とても可愛がってくれた、と日本語で伝えて下さった。そのときの複雑な気持ちを、私は忘れられない。日本が台湾を統治していたことは恥ずべき過去だと思っているし、またその親日的な感情は台湾政府や中国に向かう反発から来ていることも否めないからだ。主にあって一つ、とは教会でよく使われる言葉だが、ともすると「神さまを知っているなら、私と同じ」という使われ方がなされているように思う。それによって本当は存在している複雑な問題が見えなくなってしまうのではないか。借り物の言葉を使わず、自らの部族に誇りを持っている人たちに、「私とあなたは同じ」と言い切ってしまうことは非常に暴力的で、植民地化と同じことになりはしないだろうか。

台湾に実際に存在する複雑な問題を、教会がもつ複雑なしがらみを、今回のプログラムの中ではしっかり話し合うことができなかったように思う。共に祈ることはできたかもしれない。確かに、共に礼拝し、祈ることで「主にあってひとつ」をポジティブに感じることはできたし、それは心から楽しく、喜びだった。しかし我々がユースとして何ができるのか、何をすべきなのか。そこに与えられた主のメッセージが何なのか、我々は受け取ることができたのだろうか。祈ることが逃げ場になっていないだろうか。そのことを問い続けられる私たちでありたい。

（長尾有起報）

参加者全員の物マネができるほど仲良しに

ひとこと

七月二八日～八月六日、宣教協約を結んでいる台湾基督長老教会のユースプログラムに参加した。昨年八月には台湾から十名の青年を迎えユースミッション二〇〇六を行ったが、今回はその交換プログラムである。

32総会における所謂「青年伝道決議」の結実とも言えよう。教団はこのために台湾協約委員会と教育委員会、学生キリスト教友愛会が協力して派遣を行った。

今回は台湾の青年七名と共に台北から台湾中部へと旅し、台湾の歴史と教会の活動を学び、交流を深めた。大きな刺激を受けて帰国した青年たちの報告に、思いを合わせたい。

（岸憲秀／教育委員長）

「新潟県中越地震」から三年後の喜び

皆さまのお祈りとお支えに感謝

一月十四日（月）午前十一時～十日町教会牧師館の完成記念礼拝が、同日午後三時～見附教会の会堂・牧師館の献堂式が行われます。『私たちは孤独ではない』ことを実感しています。小出教会のために引き続きお祈り下さい。

写真上、見附教会、新会堂
写真下、十日町教会牧師館

聖名を讃美します。

「夜は更け、日は近づいた（ローマ13章12節）」。

見附教会は度重なる災害で、再建不能な打撃を受けました。にもかかわらず、これによって私共の信仰が純化されました。皆様からの貴重な献金により新会堂・牧師館が完成したのです。新しき主の業の始まり！ 歓喜に満たされています。試練（災害）を乗り越える道をも備えられていたのです。『朝の来ない夜はない』。ただ主に感謝です。

見附教会
牧師 柳田剛行

三年前の新潟県中越地震で被災した牧師館が、もうすぐ完成しようとしています。この時間は私たちにとって決して短くはありません。でも、わずか三年での再建であるとも言えます。

工事中の牧師館を眺めながら思うのは、それが長かったのか短かったのかではなく、教会の新しい歩みのために必要な時間・信仰の成長に必要な経験だったということです。変わらない主のお導きと皆様のお祈りに心から感謝です。

十日町教会
牧師 新井 純

Title: 新報4641号.ec7 Page: 3 Date: 2013/08/15 Thu 13:44:15

「平和に生き、隣人を愛せよ」をテーマに

「第十一回日本基督教団と台湾基督長老教会との教会協議会」が、十一月八日から十日にかけて台湾南部の壽山中会に属する鳳山教会を会場に行われた。出席者は日本基督教団（以下教団）から十七名、台湾基督長老教会（以下PCT）からは二四名。

初日（八日）夜に行われた開会礼拝では、PCT総会議長の潘慶彰牧師が今協議会のテーマである「Living Shalom and Love my neighbor（平和に生き、隣人を愛せよ）」と題した説教で、隣人としての台湾と日本の両教会がこれからも手を携えて協力関係を築いていきたいこと、また特にPCTとしては台湾が独立国家としての地位確立をめざす動きに大きく関わり、国連において認められることを願っていること、そしてPCTとしては地方教会への支援が課題となっていることなどが語られた。

鳳山教会（高雄）正面玄関で

二日目（九日）と三日目（十日）は、いずれも午前八時三〇分の聖書研究から始められた。九日は教団の高柳竜二牧師（神奈川教区議長・本牧めぐみ教会）がイザヤ書11章1～11節をテキストに担当。十日はPCTの胡宏志牧師（世界宣教委員・台北中会聖望教会）がマタイによる福音書5章9節をテキストに、現在の世界情勢を踏まえて「戦争は平和を求める人類にとって、最も恐るべきことである」と語り、「真の平和の基礎は神の義と平和にあり、錯覚した平和を示す偶像を明らかにし、取り去らなければならない」と力強く締め括った。

聖書研究に続いて二日目の午前中には、PCTと教団それぞれの代表者が約一時間の主題講演を行った。

PCTからは張徳謙総幹事が、「神から管理を委ねられているものを所有物として理解するところに誤りが生じる」とし、「平安とは受けると同時に分かち合うことである」と語った。具体的には、総幹事として各教会に対して毎年度末の繰越金を他の教会のために献げる提案をしていることを挙げた。また、経済偏重主義や貧富の格差という現実の中で、全世代に対する生命の教育を通し信仰共同体・生活共同体を築く営みを始めていることなど、社会的な課題を担う中に宣教の場がある、と語った。

教団からは小林眞副議長が「日本国憲法…特に第九条を巡って」と題して講演した。個人的に地域での護憲運動に関わっていることから語り始め、日本国憲法の成立・特徴、憲法をめぐる現状、憲法と教育基本法の関係などを述べ、憲法改定に反対し護憲を推し進めると締め括った。このテーマは、中国の軍事的脅威下にある台湾の現状をふまえて事前にPCTからの要請で取り上げたが、憲法改定反対が全教団的な取り組みとはなり得ていない実状があり、自衛隊は容認すべきとの発言もあり、また反対に教団側の出席者の一人から自衛隊容認はできないとの発言がでるなどの一幕もあった。

これらの主題講演の後、二日目の午後と三日目の午前に三回にわたって全体協議を行い、講演を踏まえて前回の共同声明に基づいての意見交換が行われた。

宣教師の相互派遣についてはすでに実施されているが、特にPCT派遣のディヴァン・スクルマン宣教師を通して北海教区がPCTの活動に大きく学ぶところがあったとの山本光一北海教区幹事の発言があり、さらに任期延長要請を準備していることも伝えられた。

神学生の交流では、玉山神学院と農村伝道神学校の相互研修について、PCTとしては総会として行っているのに対し、教団は一神学校のプログラムとしての受け止めであるとの認識の違いが明らかになり、PCTからは公式に教団として進めて欲しいとの要望が出された。

また、教団兵庫教区とPCT高雄中会で「宣教協力と交流合意書」が結ばれていることが紹介され、継続されている青年交流を含めて、今後さらなる宣教協力が深められることが期待された。

2日目午後、全体協議で共同声明について意見交換

この協議会がさまざまな交流の基本となることを踏まえた上で、双方に共通する高齢化・少子化、経済格差、環境保護、移民・外国人労働者などの諸課題に対しても、次回の協議会の中で取り上げる、あるいは個別協議を設定してほしいなど意欲的な要望が出され、それらを受け止めた「共同声明」が出された。

（高橋真人報）

連続大量差別はがき事件に学ぶ

第20回神学校等人権教育懇談会

20回を数え、差別を巡る課題はなおも重く…

十一月五日（月）午後、教団会議室において第二〇回神学校等人権教育懇談会が開催された。参加者は発題者、関西学院大学神学部、聖公会神学院、同志社大学神学部、東京聖書学校、東京神学大学、農村伝道神学校、東京教区部落解放五支区代表者会、主催者の計十一名であった。

今回は先ず、発題者である浦本誉至史さん（部落解放同盟東京都連合会執行委員）より「連続大量差別はがき事件」についての報告を聞いた。

この事件は、二〇〇三年五月より一年半の間、東京を中心に全国の被差別部落出身者や、ハンセン病元患者、在日韓国・朝鮮人、障がい者など被差別少数者に対して、極めて悪質な差別はがきが大量に送り付けられたものであった。

発題者の浦本さん自身が全体で四〇〇通以上にも及ぶ差別はがきの四分の一を受け取る被害者であった。はがきの内容も悪質極まりないが、その手法も浦本さんの名前を語ってハンセン病元患者への差別を行うなど卑劣なものであった。浦本さんはこの世の生き地獄を体験したと、その苦衷を述べられた。

犯人は逮捕され、裁判の結果懲役二年の実刑判決を受けて服役し、本年二月に出所しているが、この事件の問題の深刻さは、被差別部落出身者に関する情報を得た周辺住民も被害者を追い出そうとしたこと、判決報道後に、浦本さんに対する差別発言が大量にネット上に流されたことである。

犯人の青年の特殊な問題としてしまうことはできず、日本社会に巣食っている部落差別意識の潜在的な根深さをこれ以上ない仕方で示される事件である。

浦本さんは事件の背後にある最大の問題は無知であると明言された。その無知とは、単なる差別問題の知識獲得によって解決されるものではなく、具体的な出会いによって人間の温もりが伝わる理解によらなければならないことを示された。

神学教育の現場でそのような「理解」をもって無知を克服して行く努力を積み重ねて行かなければならないことを強く思わされ、今後の懇談会の方向性について協議し、次回の予定を決めて散会した。

（高柳富夫報）

お知らせ

★教団年鑑刊行のお知らせ

このたび、日本基督教団年鑑二〇〇八年版を刊行いたしました。今回も新たな情報を満載しておりますので、是非、最寄りのキリスト教書店もしくは当方に直接お買い求めください（定価三六〇〇円＋税）。また、ご購入いただいた方には、是非アンケートハガキにお答えいただき、当年鑑についてのご感想やご批判をいただければ幸いです。来年三月発行予定の追録を送ります。なお、直接お買い求めの際は、〇三－三二〇二－〇五四一事務局総務部にお電話ください。

二〇〇七年十二月

日本基督教団総務部年鑑係

消息

原 まさ氏（隠退教師）

十月十日、逝去。八四歳。滋賀県に生まれる。一九四八年ホーリネス聖書神学校卒業後、聖都教会に赴任。その後聖心、小松川、柏旭町各教会を牧会し、五六年から九八年まで小松川教会牧師を務め、隠退した。遺族は夫の登さん。

細川 覚氏（石巻栄光教会主任担任教師）

十月十四日、逝去。六三歳。岡山県に生まれる。一九七二年同志社大学大学院修了後、七三年石巻栄光教会に赴任し、同教会牧師を務めた。遺族は妻の富代さん。

バングラデシュ－ サイクロン救援募金のお願い

主の御名を賛美致します。

さて、去る11月15日、超大型サイクロン「シドル」がバングラデシュのベンガル湾沿いの低地一帯に大きな被害を与えました。20日現在、死者3,500名を超え、最終的には1万人に達する恐れがあり、被災者は数百万人に上ると報じられています。道路網寸断の中でヘリコプター輸送援助が行われていますが、到着しないヘリを多数の被災者が待ちわびる状態です。

社会委員会は すでに被災者支援活動をはじめたAction by Churches Together (ACT) International の呼びかけに応えて緊急救援募金を行います。ご協力をお願いいたします。

2007年11月22日

日本基督教団社会委員会委員長 張田 眞

記

◎募金期間 2008年3月末
◎目 標 額 1,000万円
◎送 金 先 加入者名 日本基督教団社会委員会
◎郵便振替 00150－2－593699
（通信欄に「バングラデシュ－ サイクロン救援募金」とお書きください）

〒169－0051 東京都新宿区西早稲田2－3－18－31
日本基督教団社会委員会

Title: 新報4641号.ec7 Page: 4 Date: 2013/08/15 Thu 13:44:17

牧師のパートナー

全国教会婦人会連合 牧師夫人研究委員会

同労者の交わり

横山 利江
（牧師夫人研究委員会委員）

◎各教区内「牧師夫人会」の現状

今回、教団十七教区中十四教区の三三地区（支区、分区）にアンケートを依頼し牧師夫人会の現状について七つの設問を試みた。この機会に各地の牧師夫人会の様子に目を向け関心を持っていただければと願う。

1. 教区、地区に牧師夫人会が
（ある）九教区二三地区
（ない、不明）五教区十地区

2. 開かれる回数は？
殆ど年一回～二回（三回～六回の分区もある）二年に一回の一泊研修会一教区

3. 教区、地区からの援助金が
（ある）八教区十九地区（二地区で婦人部、教区婦人会連合より）
（金額）五千円～十万円
（なし）三地区

4. お世話役は？
輪番（一年～二年交代、地域毎）話し合いで可能な者が受ける

5. 内容は？
教会に集い礼拝、懇談、近況報告、会食、テーマのある学び、施設訪問、音楽会、観光、家族会、歓送迎会、一泊研修会

6. 参加人数は？
六人～四〇人（最多十人前後）

7. 牧師夫人、牧師夫人会について感じていること、考えていること

○教会外で働く方が多い
○子育て中、教会の用で忙しく牧師夫人会の参加も出来ない
○牧師夫人のあり方は益々多様化している
○夫を牧師として尊重し自分の立場を自覚している方は同志との交流を願っている
○自然に謙虚にパートナーを支え教会に仕えている方が多い
○牧師と共に牧会する立場を取ることが良いと考える。教会の業に参与させていただき感謝
○若い牧師夫人方と考え方の違いを感じる（対教会、教会員）
○牧師を単なる職業と考えて欲しくない
○一般の信徒として牧師、長老会に従い必要に応じ牧会的フォローもする

《牧師夫人会について》
○共通の課題を語り合える会
○牧師夫人会は必要と思う
○あせらず細く長く存続を
○牧師夫人会という言い方に抵抗感、違和感がある、牧師夫人て一体何？
○牧師夫人会の別称を持って運営している（例オリーブの会、ベタニヤ会、牧師のパートナーの会等）
○高齢化、伝道不振で危機的状況の今、共に宣教をテーマに祈り求めて行きたい

「全国牧師夫人の会」については遠い存在と感じている方もいらっしゃるようだが、明るく活気に満ちた集いであるので可能な限りチャンスがある時には是非ご参加されるようお勧めしたい。

最後に何より記したいことは教団新報に牧師夫人会の現状を取り上げていただいたことへの感謝である。アンケートに現れているように多様化の時代は確実に来ている。又一方で各地から届いた回答の向こう側から伝わってくるのは微かながら確かに息づく歩みである。同労の仲間と出会い語り合い心を癒し、力を得ることが出来るのならこの歩みは絶やしてならないと考える。

各地の教会に生きる牧師のパートナーのお働きを覚えつつこの報告を終える。

西東京教区オリーブの会例会
成瀬台教会を会場に講師の迫川道子牧師（前列左から二人目）を囲んで

東京YMCA早天祈祷会は700回記念会を迎えた

《戦後再開58年間休まず月一回祈りあう》

二〇〇七年十一月一日、東京YMCA早天祈祷会は七〇〇回目を迎えた。午前七時、山手YMCA（西早稲田）に五〇人が出席して行われ、木村利人氏（恵泉女学園大学学長）の「新しい天と新しい地」と題する奨励があった。木村氏は次のように証しした。高校で受洗した時、記念に戴いた聖書の表紙の裏に「新しい天と新しい地」の聖句が書かれていた。まさに洗礼を受けたそのことが、自分にとって新しい天と新しい地であったと、自らの歩みを語った。

フィリピンのワークキャンプがきっかけで生まれた歌「幸せなら手をたたこう」は、詩篇四七から導かれ、神によって生かされている幸せを態度に示そうよと歌った経緯を明かした。

奨励の最後に木村氏は、光の子として態度に示し、一回限りの人生を、いつも新しい天と新しい地に生きることを目指しつつ、共に主にあって歩んで行こうではないかと、力強く結んだ。

この東京YMCA早天祈祷会は一九二三（大正十一）年十月から始まった。赤煉瓦の神田基督教青年会会館、当時の社交室に毎週日曜日朝六時半に集まる数人の祈祷会が始まりである。

一年後関東大震災。美しい会館を失う。焼け跡で熱心に祈る。死者を移し集め、飲み水を配る。賀川豊彦が神戸YMCAから救援物資をもって駆けつける。賀川指導のもと、救護活動と共に大早天祈祷会へ。時には二百数十人を数えた。

一九二九（昭和五）年復興した会館屋上の礼拝堂が祈祷会にあてられ、小崎道雄などの指導があった。

やがて、太平洋戦争勃発、世界YMCA同盟からの脱退、戦局厳しさを増す一九四四年末まで、祈りの灯は絶えることはなかった。

戦後一九四九年、GHQによる会館接収解除の翌七月一日、青年有志一八人が立ち上がった。早天祈祷会の再開である。以来毎月一日とし、五八年を経て七〇〇回目のこの日を迎えた。

毎年十一月にはYM・YW合同祈祷会がある。在日韓国YMCA共々、新たな祈りの輪が広がっている。

（鈴木功男報）

「米軍再編成」に反対する声明

2007年11月13日

日本基督教団
総会議長 山北宣久
同 常議員会

かつての冷戦時代は、ある国が強力な軍事力をもって支配し、ある種の平和を保とうといたしました。それは古代社会のローマ帝国支配から「パクス・ロマーナ（ローマ式平和）」とも呼ばれました。しかし、真の平和はそのような軍事力では作ることはできません。それらは逆に緊張と不信を生みだし、お互いの生命を脅かすものでしかありません。

現在、ブッシュ政権（米軍）は、「世界規模のテロ」や「大量破壊兵器」などの「新たな脅威」への対抗という名目で、先制攻撃戦略を考え、軍事力を効率的に行使するために、世界的規模で＜米軍再編成＞を推し進めています。

この再編計画には、世界のどこにでも先制攻撃を迅速に展開できる機動的な軍隊配備と、共に戦う同盟国との軍事協力を確認するという両面があります。

この再編成構想には、当然、日本も組み込まれており、憲法改正を視野に入れた、自衛隊と在日米軍との一体化を図る再編であり、到底許すことはできません。

私たち日本基督教団は、これまでも憲法第九条を遵守し、「戦争は行わない」姿勢であることを、声明などを通して明確にしてきました。これは、かつての忌まわしい戦争の深い反省に立つだけでなく、私たちの信じる主キリストが、「剣を持つ者は、剣によって滅びる」と教えられたからです。

これらのことにより、私たちは、米軍再編成という計画に強く反対し、日本から米軍基地をはじめ、戦争に加担する軍事施設など、一切が撤去されることを強く求めます。

ひとときの人

松本紳一郎さん

「荒野の40年」を経て

1948年、東京生まれ、東京神学大学神学生、ACEF理事、五反田教会員

松本さんはいわゆる団塊世代ピークの生まれである。父親がクリスチャンで、教会付属幼稚園に入り、教会学校にも通った。高校生になり、主日礼拝に出席し、兄姉の真剣に礼拝を守る姿に接する中で、聖書から「原罪」を問われ、キリストの贖罪を示され、受洗へと導かれた。

そのうち心の奥底に「伝道者献身」の思いを持つようになった。しかしそれが「召命」か、単なる憧れや願望なのかを見極めるべく、幅広い教養科目を学べる大学に進学した。その頃「学園紛争」が激化し、卒業時には「教団紛争」という事態も出現、そのような状況を乗り越える「牧師像」を明確に描けず、自分が牧師になるよりも、牧師を助けて教会を守るために命をかけることのできる信徒であろうと決心した。礼拝生活が守られ、教会奉仕のできる職業を希望し、民間企業の研究所に就職した。

またこの時期に結婚し、長男も与えられた。やがて主の不思議な導きで妻と息子に信仰が与えられ、クリスチャンホームとされた。

やがて高度成長が行き詰まり、日本経済が大きく低落する中で、松本さんは人々の窮乏を目の当たりにさせられた。自分さえよければよいと、自分の欲望を満たすことだけを追い求め、実は自分をも見失ってしまっている同時代人、この影響を受けた次世代の若者たちに、本当の命と希望の根源である方を伝える伝道の急務を実感させられた。

その思いはアジアキリスト教育基金（ACEF）の活動に参画するようになったことを通しても強められた。祈りの中で御心を問うようになったとき、主の呼びかけが明瞭に聞こえてきた。

現在、松本さんは主の最初の呼びかけを聞いてから「荒野の四〇年」に相当する準備期間を経て、伝道献身者として立てられるべく、神学生としての奉仕と研鑽の時を備えられている。